

※字数指定のある問いでは、特にことわりのない限り、句読点等の符号も一字分と数えます。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈問題文中の※は、終わりに注があります。また、問題文を一部書き改めています。〉

お金の交換機能

ア その一方で、お金を得るために、人をダマしたり、犯罪をおこなったりする人のニュースには事欠きません。ある意味で
お金には、人の心や行動を支配し、変えてしまう側面がある、といえるかもしれません。

イ たとえば、「円」の紙幣や硬貨を持っていれば、日本中どこでもそれを使って買い物をすることができます。海外でも、
日本円をその通貨に替えることで、物を買ったり、交通機関を利用したり、宿泊施設に泊まったりできる国は、とてもた
くさんあります。

ウ どちらにしても、お金の持つひとつの機能が、そうした現象を生んでいることは間違いありません。それが、モノやサー
ビスの対価として支払われるという、「交換」機能です。

エ 私たちの多くは、当たり前過ぎて、そのことをふだん意識したりはしませんが、お金は非常に便利なものです。

現在では、日本なら円、アメリカならドル、のような「法貨」と呼ばれるお金の場合、それを発行した国（円ならば日本）
の中では、
①、という決まりがあります（日本のように、買い手が一度に同種の硬貨

を二枚以上使って支払いをしようとする場合、売り手はその受け取りを拒否できる、など若干の例外が設けられているケ
ースはありますが）。そのため、多くのお金を持っている人は、そのお金を使える国や地域であれば、たくさんのお金やサ
ービスを購入することができのです。ただし現在では、経済が「A」フクザツになり、お金の役割も交換機能だけではなくな
っています。しかし基本的には、お金が誕生した大きな理由は、この交換という作業を、簡単に、そして円滑にすることに
ありました。

経済の発展とお金の登場

人類の歴史において、経済は長い間、モノとモノの交換という形で成り立っていた、と考えられています。海沿いに住む人々が海産物を運び、それを、農民が育てた穀物や、山で^Bサイシユウした薬草などと交換する、といったようにです。しかし経済が発展すると、そうしたモノ同士の交換では、不便も生じるようになります。たくさん種類のモノが登場する中で、人々の売りたいモノ、買いたいモノが多種多様になり、それらの交換が必ずしもうまく行かないようになったのです。

たとえば、Aというモノを持ち、Aをあげるかわりに、Bというモノをほしい人がいたとしましょう。この場合、交換が成立するには、**1** を持ち、**2** をあげるかわりに、**3** をほしいという人がいなければなりません。経済が発展する前なら、交換されるモノは、種類のかぎられた生活必需品であることが多く、その交換は比較的スムーズだったでしょう。

しかし、さまざまな種類のモノがあらわれると、状況は変わります。Bは持っているけれど、**4** ではなく、**5** や**6** がほしい。人々のヨツキユウが多岐にわたるようになったために、そんな人も多くあらわれるようになったのです。これでは交換が成り立たなくなります。

そうした状況の中から登場したのが、交換のための道具、すなわちお金です。お金というものを媒介^{※2}にして、すべてのモノの価値をお金に換算する。そしてモノを売る際は、そのお金と交換し、得たお金で別のほしいモノを買えばよい、と人々は考えたのです。

このように人類の社会は、経済の発展とともに、交換機能を持った媒介物を必要とするようになり、そこからお金というものを持つようになったのではないかと見られています。

「銀地金」を切って使用する

知られている中でもっとも古いお金は、紀元前二四世紀頃、メソポタミアで使用されていたものです。ただしこのときは、まだ「貨幣」という形態は存在していません。貴金属、とりわけ「銀」に、お金の役割（交換機能）を持たせたのです。

そこではまず、銀の含有率がきちんと管理された「銀地金」と呼ばれる金属塊が製造されました。そしてそれをもとに、銀の延べ棒（インゴットとも呼ばれます）や小片、銀を細い線状に引き延ばしたもの、などがつくられ、これらが少しずつ

人々の間に^Dリュウツウするようになっていったのです。取引の際は、小片や線状になった銀の重さを天秤^{てんびん}などではかり、それらに必要な分だけ切って渡すことが一般的でした。

この時期、メソポタミアでは、王を中心とする「都市国家」が成立しています。そうした都市国家は、その権力によつて銀地金に含まれる銀の含有率を管理し、銀を使った取引が適正におこなわれるよう配慮^{はいりょ}したのです。

銀がお金の役割をはたすようになった過程では、注目すべきことも起きました。

② かなり早い段階で、「利子」という概念が生まれたのです。

実際、紀元前一九世紀前後のものとされる「エシュヌナ法典」（メソポタミア北部のエシュヌナ王国の法律集、という意味です）や、紀元前一八世紀くらいにできた有名な「ハンムラビ法典」（ハンムラビは、都市国家バビロンの王で、ちに勢力を拡大してバビロニア帝国を築いた人物です）には、利子率に関する多くの記載がなされています。

たとえばどちらの法典にも、銀を貸しつけた場合、その利子率は年率二〇パーセントだと書かれています（『図説 お金の歴史全書』）。

歴史上、利子が誕生したのは、法典がそれを書き残すようになるはるか以前のことだった、と考えられています。もしも、利子がなければ、貨幣やあまった穀物などをもつ人々が、持たない人々に対して、それを貸そうとはあまり思わないはずで、人類は、そのことを早くから理解し、経済活動の中に利子という考え方を取り入れていったのです。

貝殻の貨幣

その後、金属以外のものをお金のように使う地域もあらわれました。

I 中国もそのひとつです。紀元前一五世紀前後、現在の中国・河南省周辺を中心として栄えていた殷^{いん}は、貝殻^{かいがら}をお金のように使っていました。それが、ヴェトナムなどで取れる子安貝^{こやすがい}という貝です。おそらく南方の^Eブゾクなどからの献上品^{けんじょうひん}だった、と考えられています。

子安貝は、その形状や、簡単には手に入らないという希少性などから、宝物視され、祭祀^{※3}のそなえもの、宝飾^{ほうしき}、高位の人々への贈り物^{おくりもの}、埋葬^{まいそう}の際の副葬品^{ふくそうひん}、などに使われました。

この場合の子安貝は、日常の取引に使う現在のお金とは、やや異なった性格のものだといえます。

II 、「物質と

しての子安貝」とくらべて、きわめて大きな価値が認められていたことを考えると、お金に似た側面もあったことは間違いないでしょう。

じつは世界の歴史では、貝殻をお金として使うことは珍しくありません。

アフリカの一部地域などでは、これが一八世紀頃までつづいていたほどです。

III

この習慣は、アフリカを苦しめた「奴隷貿易」にも役立った、とされています。

少し説明しましょう。アフリカ北西部のマリヤ、インド洋のモルジブ諸島といった地域では、長い間、貝殻がお金として使われてきました。しかしこのとき、地域によって貝殻と金の交換比率が大きく異なっていました。たとえばマリでは、金とくらべた貝殻の相対価格が高く、モルジブ諸島では、逆に金の相対価格が高かったのです。

一五世紀末になると、ポルトガルは、アジアの超大国インドとの貿易をさかんにすべく、アフリカの西側をまわる航路を開拓しようと試みます。そしてヴァスコ・ダ・ガマの艦隊が、アフリカの喜望峰を経由する「インド航路」を発見したことで、それが実現しました。

インド航路を使った航海が活発になると、ポルトガルの商人たちは、地域間で貝殻・金の交換比率に大きな差があることに気づいたのです。そこで、彼らが取った行動は、次のようなものでした。

まず最初に、金の安い地域で、金を大量に買い入れます。そしてそれを、金の高い地域に持って行って高く売り、その代金として貝殻を安く買います。次に彼らは、貝殻が高く、金が安い最初の場所に戻り、今度は貝殻を高く売って、金を安く買い入れました。

IV

彼らは、両地域の間を往復し、金と貝殻をうまく交換するだけで、巨額の利益を得ていたのです。その後、一七～一八世紀になると、ヨーロッパで大きな力を持つようになったオランダとイギリスも、この貿易に参加するようになりました。

そしてここから得られた利益の一部は、現在のベナンなどアフリカ西海岸等でおこなわれていた奴隷貿易の対価としても使われるようになった、といわれています。

このこと自体、マリやモルジブ諸島などの人々には、なんの責任もありません。現在のように、情報が世界中を瞬時に飛びかう時代と違い、当時のほとんどの人々は、離れた外国のことを知る手段をなにも持たなかったからです。

それに対し、ポルトガル人やイギリス人などは、海洋航路を積極的に開拓することで、世界のさまざまな場所の情報を入手できるようになります。これこそが、彼らの力の源泉となったのです。一五世紀中頃から始まる「大航海時代」以降、ポルトガルやスペイン、イギリスといった国々は、世界各地に勢力を広げ、多くの地域を支配していきます。そしてこの現象の背景には、情報のいち早い入手とその独占、という要素がありました。

(真 淳平 著『人類の歴史を変えた8つのできごとI』より)

※1 法貨 ……「法定通貨」の略。国が法律によってその通用を保証している通貨。

※2 媒介 ……仲立ち。二つのものの間に何らかの関係をつけるもの。

※3 祭祀 ……祭り。神や祖先を慰めたり称えたりすること。

※4 奴隷貿易 ……国際間で行われる奴隷の取引を指すが、特に一五世紀から一九世紀にかけて多くのアフリカ黒人たちが重要な労働力として、南北アメリカ大陸の農場などに売られていたことが有名である。

※5 ヴアスコ・ダ・ガマ ……ポルトガルの航海者、探検家。

※6 大航海時代 ……一五世紀半ばから二世紀の間におよぶ、ヨーロッパ人のインド、アジア、アメリカ大陸への海外進出を指す言葉。

問一 A～Eのカタカナを、漢字に直してていねいに書きなさい。

問二 問題文の最初の「ア」「エ」の四つの段落は、並び順が入れ替わっています。これを正しい順番に並び替え、解答欄に合うようにア～エの記号で答えなさい。

問三 I IV に入れるのに最も適当な語を、それぞれ次のア～エの中から一つずつ選び記号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|------|---|-----|---|------|
| ア | そして | イ | しかし | ウ | そこで | エ | たとえば |
| オ | つまり | カ | なるほど | キ | また | ク | やはり |

問四 ① に入れるのに最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 支払いの対価として使うことを拒めない
 イ 少量であるならその受け取りを拒めない
 ウ 正しい理由があればいくら使ってもよい
 エ モノやサービスの購入に限り使つてよい

問五 1 6 には、それぞれ A・B・C・D のいずれか一つが入ります。その組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア	1	A	2	A	3	B	4	C	5	A	6	D
イ	1	A	2	B	3	C	4	B	5	A	6	D
ウ	1	B	2	B	3	A	4	A	5	C	6	D
エ	1	C	2	C	3	D	4	A	5	C	6	D

問六 ——— ② 「かなり早い段階で、『利子』という概念が生まれたのです」とありますが、
 〈1〉「利子」という語の意味を、「お金やモノを貸した人が」という書き出しに続く形で、二十字以上三十字（書き出しをのぞく）以内で説明しなさい。

〈2〉筆者はなぜ「かなり早い段階で『利子』という概念が生まれた」と考えたのでしょうか。その理由の説明に当たる一文を問題文中からぬき出し、最初の五字で答えなさい。

問七 ——— ③ 『奴隷貿易』にも役立った」とありますが、その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア アフリカでは、子安貝の貝殻をお金として使う習慣が一八世紀頃までつづいていたために経済が発展せず、「奴隷貿易」をめぐるヨーロッパ人との競争に勝てなかったということ。
 イ アフリカでは、金との交換比率からみて子安貝の貝殻の価格が高かったために、ヨーロッパ人はそれをお金とすることとで「奴隷貿易」の利益をさらに大きなものにしたということ。
 ウ 子安貝の貝殻をお金のように使う地域が存在したことで、それと金との交換比率の違いがヨーロッパ人たちに巨額の利益をもたらし、それが「奴隷貿易」にも使われたということ。
 エ 宝物あつかいされることもあった貴重な子安貝の貝殻をお金の代わりにすることで、ヨーロッパ人たちは「奴隷貿易」でたやすくアフリカの人々を買い取ることができたということ。

問八 ——— ④ 「彼らがとった行動」とありますが、その具体的な説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア たとえば、アフリカ北西部のマリで金を大量に買い入れ、それをインド洋のモルジブ諸島で安く売って貝殻を高く買う。それからまたマリに戻り、貝殻を高く売って金を安く買い入れる。
 イ たとえば、インド洋のモルジブ諸島で金を大量に買い入れ、それをアフリカ北西部のマリで安く売って貝殻を高く買う。それからまたモルジブ諸島に戻り、貝殻を高く売って金を安く買い入れる。
 ウ たとえば、アフリカ北西部のマリで金を大量に買い入れ、それをインド洋のモルジブ諸島で高く売って貝殻を安く買う。それからまたマリに戻り、貝殻を高く売って金を安く買い入れる。
 エ たとえば、インド洋のモルジブ諸島で金を大量に買い入れ、それをアフリカ北西部のマリで高く売って貝殻を安く買う。それからまたモルジブ諸島に戻り、貝殻を高く売って金を安く買い入れる。

問九 ——— ⑤ 「ポルトガル人やイギリス人など」とありますが、当時彼らが遠く離れたインドやアフリカなどの人々に対して力をふるい、支配することができたのはなぜですか。問題文の内容に沿って問題文中の語句を用い、具体的にわかりやすく説明しなさい。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈問題文中の※は、終わりに注があります。また、問題文を一部書き改めています。〉

ある街に小さな白い猫がいました。もとは野良猫でしたが、お母さんが死んでひとりぼっちだったところをお兄ちゃんに拾われました。その猫は、彼のいとこであるあんずちゃんに似ていたため、あんずという名前になりました。実は、あんずは重い病気にかかっているのですが、何でも売っている不思議なコンビニで人間になれるキャンディを買い、女の子の姿になって飼い主と暮らす自分の家へ、家族に会いに帰ります。すると、海外から帰国するといういとこのあんずちゃんと勘違いされてしまい、人間の姿のまま家に泊まることになってしまいました。

気がつくと、お兄ちゃんがいまいませんでした。あんずは、小さい子たちをお風呂に連れて行ったあと、ひとりで、二階のお兄ちゃんの部屋に行きました。猫の体でのぼるときは、全身ではずむようにジャンプしないと上がって行けなかった長くて高い階段も、人間の女の子の体には、ほんの二十段ほどの、狭くて小さな階段でした。

お兄ちゃんは、物干し台にいました。そこには、古い天体望遠鏡が置いてあって、お兄ちゃんは星を見ているのです。あんずはそのそばに行き、「あたしにも、見せてください」と頼みました。

お兄ちゃんや、木箱にのった小さい子たちや、お母さんものぞきこむ天体望遠鏡を、一度、あんずは見てもみなかったのです。ずっと前、子猫のときにお兄ちゃんが抱っこしてのぞかせてくれましたが、猫の目には、なにも見えませんでした。ただ暗くて、ぼんやりしているだけ。

でも、人の目で見れば、そこには、「星」が、「宇宙」が見えると、みんなは言っていました。「きれい」だと。

① お兄ちゃんは、あんずは、場所をゆずってくれ、見えやすいようにしてくれました。一つ息をついて、あんずは、天体望遠鏡をのぞきこみました。

なんだかきらきらするものが、たくさんそこにありました。暗いところに、小さい光がいっぱい、ともっていました。それは、夏の木もれ日のきらきらや、冬のストーブの炎のような、どこか懐かしく感じる、きれいな光の小さな欠片でした。

光は、笑っているようでした。きらきら輝きながら、やさしく、こちらを見下ろしているようにも見えました。

「あれが、「宇宙」？ あれが、「星」？」

あんずは、星を見たことがありますでした。「今日は星がきれいだね」とみんなが言う夜にも。猫の目は、動かないものを見るようにはできていないし、視力も良くないから、夜空を見上げても、星はひとつも見えなかったのです。望遠鏡から目をはずして空を見上げてみました。はつきりとは見えませんが、でも、いまのあんずの目には、うつすらと、さつき見た星空が、そこにあるのがわかるようでした。

「あんなきらきらに、あたしは、いつも、包まれてたんだ……」

あんずは、空を見上げました。それはどこか、とてもうれしくて、ほっとするような気がしました。いままでひとりぼっちだと思っていたとき……公園でジャスミンの花を見上げていたときも、あの夜も、星空はそこにあったのです。

あんずの目には見えなかっただけで、宇宙では、星たちが、きらきらと光をともして、あんずを見つめてくれていたのです。

あんずは、つぶやきました。

「②」

きらきらの中には、死んだお母さん猫の瞳のきらめきがあるような気がしました。あんずをやわらかな体で包みこみ、やさしくなめて、守ってくれたお母さん。病気で倒れて、苦しんで、死んでしまったお母さん。

「あんなどころに、いたんだ……」

あんずを置いて、急に消えてしまったように思っていたけれど、お母さんは、ずっとずっと、あんずを見ていてくれたのかもしれない。あんずが気づかないときも、見守っていてくれたのかもしれない。遠い、星の海から。

「そうだね」と、お兄ちゃんが言いました。

「ぼくはひとりじゃないんだって、ぼくも星を見るたびに、思ってたよ。宇宙の星は、ぼくを見つめて、見守ってくれてるんだなって」

「懐かしい人の……目みたいにな？」

あんずの胸は、1 鳴りました。

お兄ちゃんは、少し驚いたように笑いました。

「うん。そんな感じに。なんだ、同じことを、あんずちゃんも思ってたんだね。さすが、いとこ同士だ」

あんずは微笑んで、そつとうなずきました。

そう、懐かしいまなざしが、いっぱいそこにありました。空は、お母さん猫のまなざしでいっぱいでした。

物干し台には、アラビアンジャスミンの鉢が置いてありました。

いつもあんずが、そのそばで昼寝をしたり、風にあたったりしている、大きなきれいな陶器の鉢です。満開のジャスミンの花は、風に吹かれて、甘い匂いをさせながら、ふるふると散っていました。一年前の夏の夜に、公園でお兄ちゃんとお会ったときと同じに。

(中 略)

「あんずちゃんは、北欧から帰ってきたんだよね？ 飛行機はとても星に近いところを飛んだんじゃない？ 空の旅はどうだった？」

あんずには、なにも答えられませんでした。

お兄ちゃんは、遠い空を見て、言いました。

「あんずちゃんも知ってるよね。四年前、ぼくが中学生で、あんずちゃんくらいの年の頃に、ぼくの父さんは、飛行機事故で死んだんだ。旅先で急にいなくなつたし、遺体が見つからなかったから、死んでしまったって気がしなくて。」

そんなある日、父さんから誕生日に買ったばかりの天体望遠鏡を見ているうちに、ふと、宇宙のどこかに、父さんがいるような気がしたんだ。父さんがそこで暮らしているような気がした。そこからこちらを見ているような。地上に向かって手を振っているみたいだ。

いまもどこか、そんな気が少ししてるんだ。その気持ちがあったから、宇宙飛行士になろうと思ったのかもしれない。いまも心のどこかで、あの星の海で、父さんに再会できると思っているのかも……」

お兄ちゃんは、2 笑いました。そうして、あんずを振り返って聞きました。

③ 笑顔だけれど、悲しそうな声で。

「ねえ、あんずちゃん。命って、どこからきて、どこに帰るんだろうね？」

あんずは、答えられないまま、うつむいて、散る花を見ていました。

風にジャスミンの花が散る様子は、どこか星のきらめきのように見えました。

いまのお兄ちゃんに話してあげられるよい言葉が思いつける魔法があれば、残された命全部と引き換えにしてもいいのに、と思いました。

やがて、「不思議だね」と、お兄ちゃんが、

3

言いました。

「いとこって、すごいんだね。小さい頃と、いまと、いままでほんの数回しか会ったことがないはずなのに、あんずちゃんはずっと知っている女の子のような気がするよ。いままでこんな話、人にしたことなかったんだけどな」

お兄ちゃんは、明るい声で言いました。その声の調子で、あんずは、よくわからないけど、自分がここにいたことはいいいことだったのだな、と、思ってたほっとしました。

お兄ちゃんは、笑顔で言葉を続けました。

「あんずちゃんは、本当にうちのあんずに似ているね。目とか、雰囲気、不思議なくらい似ているよ。そばにいと、なんだかほっとするし、^④から力が抜けて、素直な自分になれそうな気がする。」

あんずには、すごく励まされたんだよ。ぼくは弱いから、あんずがいなかったら、だめだったと思う。泣いちゃってたかも。なにもできなくなっていたかも。笑われるかもしれないけど、ちっちゃな猫に、ぼくはこの一年間、守られていたんだよ」

あんずはきよとんしました。お兄ちゃんはいっだって笑顔で元気で、お母さんを支え、弟や妹や、猫のあんずを守りかわいがる、強くて、立派な人だったからです。

^⑤お兄ちゃんは、言いました。笑顔で、でもため息をつくようにしながら。

「ぼくはね、父さん亡きあと、ぼくが、しっかりしなきゃいけないと思っていたんだ。妹はまだ赤ちゃんだったし弟は小さいし、悲しみで倒れそうになってた母さんに心配かけたくなかったから、せめて、ぼくだけはいつも元気になって思ったんだ。」

だけど、本当は、つらかったんだ。父さんがいきなりいなくなって、ぼくだって悲しかったし、とても不安だったし。なにしろ、まだ中学生だったんだもの。

でも、そんなこと、誰にも言えなかったんだ。だってぼくが、ぼくまで泣いたら、泣きくずれてしまったら、家族は壊れてしまう。我慢しよう。ぼくが父さんのかわりにこの家を守らないと、いつも笑顔で、しっかりしていないと、って。

そうして三年間、季節が三回めぐるあいだ、がんばって……がんばってきたけど、つらくなって、倒れそうになっていた

ときに、子猫だったあんずを拾ったんだ。

夏の夜、公園のジャスミンの下に座っていたあんずは、白くてちっちゃかった。でも、抱き上げると、あったかくて、やわらかくて、生きてるって感じがした。

これが命の重さで、あたたかさだって、思った。抱きしめて、のどがごろごろ鳴るのを聞いていたり、ざらざらの舌で顔をなめられると、なぜかなあ、幸せになって、泣きたい気持ちも忘れたんだ。そのあとも、いつも抱きしめるたびに幸せになれた。

あんずには、感謝してるんだよ。ぼくは大好きなんだ、あんずのことが」

あんずは、どきりとしました。ほおが熱くなって、両手で包みました。

お兄ちゃんはそのことには気づきません。物干し台の手すりによりかかって、

「猫の寿命は、大事にすれば、二十年以上にもなるんだってね。ぼくはあんずを大事にして、あんずがおばあちゃん猫になるまで、うちにいてもらうんだ。ぼくが宇宙飛行士になって、星の海に行って、帰ってくるまでね。」

大好きなあんずと、未来まで、ずっと一緒にいたいんだ。ぼくを守って励ましてくれたぶん、大切に、幸せにしてあげたいんだよ。一生かわいがってあげたいんだ」

^⑥あんずは、微笑みました。

風になびいた髪をはらうふりをして、ひとしずくだけ浮かんだ涙を、ぬぐいました。

(おばあちゃん猫になるまで、このうちに、いたかった……)

本当なら、もしあんずが元気なふつうの猫だったら、あんずにはそれができたかもしれません。この家で、お兄ちゃんの夢が叶うのを見届け、星の海へ行ってまた帰ってくるのを待っていることが。幸せに年老いてゆきながら、お兄ちゃんやお母さん、小さな子たちの幸せを、おだやかに見守ってゆくことが。

猫は人間よりもはやく時を生きるから、子猫だったあんずが、たった一度の季節のめぐりのあいだに、こうして、お兄ちゃんとあんまり変わらない年の女の子になったように、あとほんの数年で、あんずはお兄ちゃんより大人になり、大きくなって……おばあちゃん猫になっていたことでしょう。

(でも、あたしは、がんばっても、もう、お兄ちゃんより大きくなれないから……)

これが、最後の夏だから。

そのとき、花火が上がりました。あんまり急に音と光がはじけたので、あんずは思わず、お兄ちゃんに飛びつくようにして、体の陰に隠れました。お兄ちゃんは、笑いました。「あんずちゃんは怖がりだなあ、まるでうちのあんずみたいだ」と。

どん、どん、と花火は上がります。

それはまるで、宇宙の星を散らしているようでした。星を空にまいて、地上に降らせているようでした。降りながら、光は

命がつきていくように。

同じことを考えたのか、お兄ちゃんが悲しそうな顔をするのが見えました。ほんのわずか、目もとに涙が浮かぶのが見えました。

あんずは、お兄ちゃんの顔を見上げ、つまさきで立つと、そつとその涙をなめました。その味に、そういえば遠い昔に思える子猫の頃、拾われたばかりの頃のある夜に、悲しい夢を見て泣いていたお兄ちゃんの涙をなめたことがあったのを、あんずは思い出したのでした。

あんずは、一瞬だけ、人間のキスをしました。花火の光と音が響いて、自分の鼓動と重なりあうようでした。

「……会いにきてね」

お兄ちゃんの顔を見つめて、あんずは言いました。

「あたしはもう、ここからいなくなるけれど、^⑦□□□で、待ってる。

あたしはあんず。猫のあんずを、忘れないでね。

あたしも、忘れない。だって、あたしは、ずうっと、あなたを……」

花火が上がりました。

気がつくと、少年の腕の中には、もう、白いワンピースの少女はいませんでした。

^⑧ただ花火は上がり続け、アラビアンジャスミンが強く香るばかりで。白い花が、風に散るばかりで。

下の階から、花火を見るために上がってきた家族たちが、その少女の名を呼んで、姿を探さなければ、少年は、自分が夢

を見ていたと思ったかもしれませんでした。

少女はたしかにそこにいて、少年にぬくもりとやわらかさの記憶だけを残して、風のように、消えてしまったのです。

(村山 早紀 作『あんず』より)

※ 小さい子たち …… お兄ちゃんの妹と弟で、幼稚園児の女の子と小学校一年生の男の子。

問一 1 4 に入る語として最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア ふうつと イ びくりと ウ はらはらと エ ひそひそと
オ ことりと カ にやっと キ ぼつりと ク きらきらと

問二 ① 「一息をついて」とありますが、あんずはなぜ「息をつい」たのですか。問題文中の語句を用いて、四十字以上六十字以内で説明しなさい。

問三 ② に入れるのに最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア こんなにきれい、だったんだ……
イ ひとりじゃ、なかったんだ……
ウ お母さん、だったんだ……
エ 星に、なってたんだ……

問四 ——— ③ 「笑顔^{えがほ}だけれど、悲しそうな声で」とありますが、この時のお兄ちゃんの気持ちの説明として適当でないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 宇宙飛行士になりたいという夢をかなえれば死んだ父に会えるかもしれないというのは現実味がなく少し笑えるが、それでも二度と父に会えないと思うとやはり悲しいため。

イ 宇宙飛行士になる夢を打ち明けたものの、宇宙で死んだ父と再会できるかもしれないなどとばかげたことを言ってしまった自分にあきれているため。

ウ 宇宙飛行士になりたいという夢のきっかけとして死んだ父の話をしているうちに父との思い出がよみがえって、命のはかなさをかみしめているため。

エ あんずに宇宙飛行士になりたいという夢を語っているうちに死んだ父を思い出してしまい悲しくなったが、あんずに気をつかわせないようにその悲しみをおさえているため。

問五 ——— ④ 「■から力が抜けて」の■に入る語として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 肩^{かた} イ 肘^{ひじ} ウ 腹 エ 膝^{ひざ}

問六 ——— ⑤ 「お兄ちゃんは、言いました」とありますが、この後に語られた内容から、お兄ちゃんはどうのような人物であると考えられますか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 家族のためには自分が犠牲^{ぎせい}になっても仕方がないと、何事においてもあきらめがちな人物。

イ 家族思いで優しい心を持っているが、誰か^{だれ}の支えがないと心が不安定になる頼りない人物。

ウ 家族を非常に大切に思っているが、周囲の人間を思うあまりにがんばりすぎてしまう人物。

エ 最も強く立派な自分が家族を導いていかなくはならないと考える、責任感の強い人物。

問七 ——— ⑥ 「あんずは、微笑^{ほほえ}みました。風になびいた髪^{かみ}をはらうふりをして、ひとしずくだけ浮^うかんだ涙^{なみだ}を、ぬぐいました」とありますが、このときのおんずの気持ちを五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問八 ——— ⑦ 「□□□で、待ってる」とありますが、この□□□に入れるのに最も適当な言葉を、問題文中から三字でぬき出して答えなさい。

問九 ——— ⑧ 「ただ花火は上がり続け、アラビアンジャスミンが強く香^{かほ}るばかりで。白い花が、風に散るばかりで」とありますが、この表現にはどのような効果があると考えられますか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 花火の上がる様子やアラビアンジャスミンの香りや花が散る様子を詳しく具体的に説明することで、非現実的な物語世界に少年を引き込^{ひきこ}もうとする効果。

イ 花火が上がる様子やアラビアンジャスミンが風に散る様子などの情景のみに注目して記述することで、生命の神秘を読者に強く印象づける効果。

ウ 花火が上がっては消える様子やアラビアンジャスミンの花が散っていく様子などをえがくことで、まぼろしの世界を夢見ているような物語世界をきわだたせる効果。

エ 花火やアラビアンジャスミンなどの情景に限定した記述をすることで、少年が非現実的なまぼろしの世界から現実の世界へ帰って来たことを暗示する効果。

問十 「命って、どこからきて、どこに帰るんだろうね?」とありますが、「お兄ちゃん」は、命はどこからきて、どこに帰ると考えていると、あなたは思いますか。なぜそのように思うのかの理由も必ずふくめ、自由に作文してください。なお、作文はできるだけ漢字を用い、正しくいい文字で書いてください。解答欄からはみ出てはいけません。また、「です・ます」で結ばなくてもかまいません。何を書いても自由ですが、評価は内容と表現の両面から行います。

二〇一五年度 中学校入学試験（第一回）
〔国語〕 解答用紙

*			*			*			*											
問九			問八			問七			問六		問五		問四		問三		問二		問一	
						（2）			（1） お金やモノを貸した人が			I		↓		A				
												II				B				
												III				C				
												IV				D				
												E								

*			*			*			*			*																
問十			問九			問八			問七			問六			問五			問四			問三			問二			問一	
																											1	
																											2	
																											3	
																											4	

氏 名

受 験 番 号

得 点
*